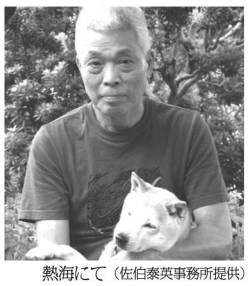
佐伯通信

2011年8月(平成23)
第5号
発行
佐伯泰英事務所
担当／幻冬舎
禁・無断転載

老犬介護の日々


熱海にて（佐伯泰英事務所提供）

梅雨の中休み、暑い夏が戻ってきた。週に一度東京に出る以外、熱海に籠っている。柴犬のビダが元気な頃は一家で東京から熱海に移動し、さらにまた東京へ舞い戻りなんてことを繰り返していた。ビダが十六歳の誕生日を過ぎて急激に衰えがきた。すでに目が白内障にかかり、聴覚が衰えていた。さらに足腰が弱ってきて、階段の上り下りが不自由になり、ついには不可能になった。咽喉部が狭くなって喘鳴が起こり、呼吸が苦しくなって昼夜を問わない徘徊が始まった。

本格的な老犬介護かと覚悟したが、咽喉を広げる薬が効を奏し、喘鳴が治まり少しだけ元気になった。女房が「百万歩」とよぶ、腰を落としてのぐるぐる回りは相変わらずで、その内、暗く狭いところに顔を突っ込んで、じいっとしている症状が加わった。

ビダは二代目の飼犬だ。初代コロは十三歳で亡くなったが、死の二週間前まで元気に散歩をしていた。異変が起こったときも散歩中で、きゃんきゃんきゃん、と突然異様な声を上げたかと思うと腰がずるずると落ちた。私はコロを両腕に抱えて獣医の下に急いだが、腰の体熱が急激に下がるのを感じた。血栓が生じたのだ。この血栓を取り除く治療を入院して続けたが、十数日後、わが腕の中でコロは亡くなった。そんなわけでコロを介護した記憶がない。

ビダの寝所はわがベッドだったが、もはやそのようなことは無理で、床に寝所を作った。深夜の徘徊が激しくなりいつまでも止める気配がない。時にブラインドの鎖に首をかけてぐるぐる巻きにして、身動きつかないこともある。五感の大部分が失われたせいか、手を差し出すといきなり噛みつく。恐怖と防御本能で反射的に噛むらしい。それでも女房は今のビダがいちばん無邪気でかわいいという。目力が失せた顔は却って純真無垢な赤子が媚の表情に似ている。いつまでこの介護暮らしが続くか、一日でも長いことを念じている。

日本もうちも暑い夏になりそうだ。

佐伯泰英／近刊のお知らせ

8月 28日発売予定
- 《新潮文庫》古着屋総兵衛影始末【決定版】11『帰還』

9月 15日発売予定
- 《講談社文庫》交代寄合伊那衆異聞『混沌』15

9月 28日発売予定
- 《新潮文庫》新・古着屋総兵衛『百年の呪い』2
  「佐伯通信」第6号が入ります。（初版、初回出荷分限定）

10月 12日発売予定
- 《光文社文庫》吉原裏同心『愛憎』15

佐伯泰英事務所の公式ホームページができました。
http://www.saeki-bunko.jp/　佐伯泰英 通信　検索

この「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が下記出版社の協力のもと年七回発行いたします。
㈱幻冬舎、㈱新潮社、㈱角川春樹事務所、㈱双葉社、㈱光文社、㈱講談社、㈱祥伝社

「佐伯通信」第6号は、9月28日発売予定の『新・古着屋総兵衛②百年の呪い』（新潮文庫）に入ります。

「職人好きの職人作家」からの贈り物

㈱幻冬舎 編集局
森下康樹

「酔いどれ小籐次留書」シリーズの魅力の一つに、数多くの職人が登場することがある。版木職、錺職、百姓舟に経師屋、畳職……まっとうな仕事に汗し、わずかな日銭を稼いで生計を立てる庶民の姿は、今更ながら、人は食べてゆくために働くのだ、という当たり前の哲学を教えてくれる。

「職人好きの職人作家」を自認する作者らしい趣向だが、主人公の赤目小籐次こそ職人のなかの職人と言えるのかもしれない。ご存じのとおり、小籐次は浪々の身となって研ぎ仕事で糊口をしのいでいる。その業前は来島水軍流の剣技と同様、父から一子相伝の秘技として仕込まれたもの。片鱗は第一巻の「御鑓拝借」ですでに見受けられる。讃岐丸亀藩の大名行列から御鑓先を奪った小籐次は、神奈川宿の問屋場で研ぎ師の伍作から砥石を借り、愛刀・備中次直の刃毀れを手ずから修復している。

その後、市井に居を構えた小籐次が、初めてとった研ぎの客が蛤河岸にうづの野菜を買いにきたおきく。翌日には棒手振りの熊五郎を感歎させる技倆を見せ、「この熊五郎が胸を叩く仕事だ！」と大音声で触れ回ってくれたおかげで、界隈のおかみさん連の信用を得た。それは、小籐次が市井の民として人々に迎え入れられた瞬間だった。

以来、久慈屋の大番頭・観右衛門、老舗料理屋歌仙楼の女将・おさき、畳職備前屋の主・梅五郎と常連客を増やした小籐次は、相身互いの精神を胸に長屋暮らしを続ける。情に絆されれば手間賃を取らない商売下手はご愛嬌だが、時代小説の英雄でこれほど生活臭に満ちた人物も珍しい。五十男の生きざまが読者の心を捉えて離さない理由の一端が、こうしたところにあると感じている。佐伯先生、素敵な作品をありがとう！

忠義を尽くす主はただ一人
想いを寄せる女性もただ一人
酔いどれ小籐次留書
一～十六
（＋「青雲篇」）
幻冬舎
時代小説文庫